

- 1 日 時 平成23年9月7日(水)
- 2 学年・組 第3学年5組(男子17名 女子17名 計34名)
- 3 場 所 第3学年5組 教室
- 4 単元名 「助詞と助動詞」
- 5 単元について

○教材観

本教材は、助詞・助動詞の付属語としての特徴を理解し、言語形式の意味・用法に意識的になることをねらいとする教材である。助詞・助動詞の違いによって、主述関係や成文のまとまり方が変わり、文の構造そのものも違ってくる。表現形式の例にふれながら、用法上の基本的な特性を理解し、表現・理解の実の場において、言語形式の意味と用法に意識的になることを目的とした内容である。

文法では、1学年で①言葉の単位(文、文節、単語、文章・段落)、②文の組み立て(主語述語の関係、修飾・被修飾の関係・文の組み立て)、③指示する語句と接続する語句について、2学年で①単語の分け方(自立語と付属語、活用の有無)、②自立語のいろいろ(活用する自立語、活用しない自立語)、③用言の活用(動詞の活用、形容詞・形容動詞の活用)について、3学年では、①本単元、助詞と助動詞②コミュニケーション(文章表現をより確かなものに、言葉のニュアンスに気を付ける)について学習する。

本教材は、助詞・助動詞の学習を通し、普段何気なく使用している付属語の大きな役割に目を開かせる内容である。

○生徒観

文法事項の理解度について、全国学力調査(NRT)の得点率を全国平均と比較してみると、品詞・用言の活用については10~12%全国平均を上回っているが、言葉の単位(文節)については全国平均とほぼ同等である。

文法の学習については、品詞の識別や活用等、地道に努力していかないと頭の中に整理できない内容が多いため、普段の国語学習に比して苦手意識を持つ生徒が多い。反面、やれば確実にできるという達成感、整然とした活用の、リズムカルな響きに対する興味関心から、俄然意欲を燃やして取り組む生徒もいる。

○指導観

具体的な文の中における付属語の働きに注目させ、言語形式の意味と用法に意識的に目を向けるようにさせていきたい。自立語に付属して用いられる言葉が、文の基本構造に大きく関わってくること、日本語の微妙な陰影を表現していく上で欠くべからざる役割を担っていることなどを、実際の文の中でじっくり捉えさせていきたい。とりわけ、類義表現を比較していく中で、助詞・助動詞の意味・用法についての理解を深めさせていきたいと考える。

さらに、日常生活の中で、自己表現及び思考の道具として活用している言葉を大切にしていこうとする姿勢を育むとともに、「言葉の意味」への関心を深め、言葉に対して、より意識的になることを目標としていきたい。

6 単元の目標

助詞、助動詞の働きを理解させる。

7 単元の指導と評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・ 付属語によって表現される「その場の状況の微妙なニュアンス」や「書き手・話し手のとらえ方の違い」について理解する。	・ それぞれの助詞がどのような意味・用法で用いられているか、まとめて書く。 ・ 助詞を含む文を作る。 ・ 助動詞の意味や働きの違いによって分類しまとめる。 (B書くこと イ)	・ 助詞・助動詞の違いによって、主述関係や、成分のまとまり方が変わることを読み取る。 ・ 助詞の文中での働きを考えながら、微妙なニュアンスの違い、書き手・話し手の	・ 表現において文中で助詞がどのような働きをしているか理解する。 ・ 表現において文中で助動詞がどのような働きをしているか理解する。

		言語活動例 イ	とらえ方の違いを読み取る。 (○読むこと ア) 言語活動例 イ					
		その時間の目標	学習活動	関・意・態	書く能力	読む能力	知識理解	
1次	第1時	助詞・助動詞の働き	・助詞の働きについて理解することができる。	・文の中に助詞を当てはめ助詞の働きについて考える。	○	○	○	○
	第2時	について理解	・助詞の分類について確認することができる。	・同じ意味用法の助詞をまとめ、分類整理する。		○		○
	第3時	する。	・助動詞の働きについて理解することができる。	・助動詞の形式と意味について理解する。		○	○	○

8 第 1 時

(1) 本時のねらい

文中における助詞の働きについて、格助詞、副助詞、接続助詞、終助詞の分類を通じて理解する。

(2) 本時の評価基準

評価規準	十分満足できると判断できる基準	概ね満足できると判断できる基準	努力を要する生徒への手立て
助詞の働きが理解できる。	助詞を正確に分類し、それぞれの働きが理解できる。	助詞の働きが理解できる。	・文中の助詞に線を引かせ、解説部分を参考にさせながら、それぞれの意味について考えさせる。 ・具体例の書かれたワークシートを渡して考えさせる。

(3) 準備物 ワークシート、コンピュータ、テレビ

(4) 指導過程

	主な発問・指示	学習活動	教師の指導と評価
導入	○絵を見ながら、「子供()猫()ねずみ()追いかける」の()に当てはまる平仮名一字を考えましょう。 ○「この本は子供も読んだ」と「この本は子供 <u>だけ</u> 読んだ」と「この本は子供 <u>だ</u> って読んだ。」の違いについて考えてみましょう。	・()に当てはまる助詞をワークシートに記入する。 ・()に当てはまる、助詞について発表し合う。 ・イラストと文との対応を比較しながら発表しあう。	・イラストに対応した文を複数作っている。 ・複数作られた文の意味の違いを考えている。(ワークシート) ・一文字の助詞で文の主述関係、成分のまとまり方まで変わってくることに気付かせる。→一文字の持つ大きな力に目を向けさせる。 ・使用する助詞の違いにより、微妙なニュアンスやとらえ方の違いが表現されることに着目させる。 ・大人だけでなく、子供も読んだ。 ・子供は読んだが、大人は読んでいない。 ・子供が読むくらい読みやすい本なので、ましてや大人は簡単に読める。

発展	<p>○例文の（ ）にふさわしい助詞を書き入れてみましょう。</p> <p>○（ ）に当てはめた言葉を、働きが似ている言葉ごとに分類し、その働きについて考えてみましょう。</p> <p>○文中の「が」「を」「と」の働きについて、考えてみましょう。</p> <p>○文中の「こそ」「まで」「しか」の働きについて考えてみましょう。</p> <p>○文中の「ば」「ながら」「たり」の働きについて考えてみましょう。</p> <p>○文中の「か」「なあ」「ぞ」の働きについて考えてみましょう。</p>	<p style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center;">共通する言葉をまとめて分類し、助詞の働きについて考えましょう。</p> <p>・接続や働きの上から、助詞を四つに分類する。 個人でじっくり考える。 →班で交流する →発表する</p> <p>・「が」「を」「と」の共通点をまとめる。 ・「こそ」「まで」「しか」の共通点をまとめる。 ・「ば」「ながら」「たり」の共通点をまとめる。 ・「か」「なあ」「ぞ」の共通点をまとめる。</p>	<p>・助詞の定義を確認させる。</p> <p>・当てはめた言葉によってどのような意味が付け加わったか、考えさせる。</p> <p>・個人で考える時間を十分に確保する。</p> <p>・分類の根拠をワークシートに書かせる。</p> <p>・どんな言葉の下にきているか考えさせる。</p> <p>・文の中での位置に目を向けさせる。</p> <p>・「が」「を」のように主語・述語などの文の成分を変えていく働きをもつものはどれか考えさせる。</p> <p>・「も」「だって」のように意味を付け加える働きを持つものはどれか考えさせる。</p> <p>・根拠の説明が難しいようなら、「関係を示す」「意味を付け加える」、「前後をつなぐ」など説明に使う言葉の例を示す。</p> <p>・「が」「を」「と」・・・主に体言に付き、下の語句との関係を示す。→格助詞（「が」「と」・・・接続助詞と区別させる。）</p> <p>・「こそ」「まで」「しか」・・・いろいろな語について、意味を付け加える。→副助詞</p> <p>・「ば」「ながら」「たり」・・・主に活用する語句に付き、前後をつなぐ。→接続助詞</p> <p>・「か」「なあ」「ぞ」・・・文や文節の終わりについて、気持ちや態度を表す。→終助詞</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">言語力の目当て表から</p> <p>助詞の分類の根拠を明確に示しながら発表するように指導する。 「私は、『が』『と』『に』は同じ助詞の仲間だと思います。なぜなら、体言について下の語との関係を示しているからです。」</p> <p>・・・助詞の名前については、働きから類推させる。自分であれば、どんな名前を付けるかな？</p>
	まとめ	<p>・本時の学習内容を確認する。</p> <p>・助詞の働きについて、具体例を挙げながら確認する。</p> <p>・助詞を使った文を作る。</p>	<p>・発表させる。</p>

(5) 板書計画

○助詞の働きについて理解する。

☆活用しない付属語。

- ・子供（ ）猫（ ）ねずみ（ ）
追いかける。
- ・子供（ ）猫（ ）ねずみ（ ）
追いかける。

◎文の構造を決める。

- ・（この本は）子供も読んだ。
- ・（この本は）子供だけ読んだ。
- ・（この本は）子供だつて読んだ。

◎意味を付け加える。

◎共通する言葉をまとめて分類し、助詞の働きについて考えよう。

*分類の根拠を明確に示すこと。

格助詞 (が・を・と・・・)

主に体言に付き、体言と下の語句との関係を示す。

副助詞 (こそ・まで・しか・・・)

いろいろな語句について、ある意味を付け加える。

接続助詞 (ば、ながら、たり・・・)

主に活用する語句に付き、いろいろな関係で前後をつなぐ。

終助詞 (か・なあ・ぞ・・・)

文や文節の終わりに付き、話し手・書き手の気持ちや態度を表す。